第５回　下田市立小学校在り方検討会議【議事録】

日　　時	令和８年２月 17 日(火)13 時 00 分から 15 時 00 分
場　　所	下田中学校　メディア棟２F

開会　学校教育課　平川課長

皆さま、こんにちは。定刻となりましたので、ただ今より、第５回下田市立小学校在り方検討会議を始めさせていただきます。初めに、会長となります教育長の山田よりご挨拶を申し上げます。

１．教育長挨拶　山田教育長

改めまして、皆さんこんにちは。毎回言いますけれども、世の中は目まぐるしく変わっているということは、もう否めません。子どもを取り巻く遊びの環境や、よく自然が昔と違って少なくなってきたから。なんていう言葉も時々耳にします。実は伊豆半島の自然は昔のまま、豊かなままだと私は思っています。そんなに大きく変わってないなって。多少景観が変わっていますけれど、伐採されてない山もあり、下田富士あたりは崩れているところもあったりして、多少景観は変わっているところがあるかもしれませんが、自然環境は変わらない。下田の強みである豊かな自然環境をいかに大人が子どもに提供するかというところだと思います。その大人が、今そのスマートフォンですとか AI、デジタル画像に夢中になってしまって、これは皆さんもご承知かと思いますが、2025 年の自殺は、統計が始まり、最高だということで、ずっと増えています。単純に計算すると、毎週 10 人が亡くなっているっていうような計算になろうかと思います。そういう社会を大人がつくってしまっているのかなということを思ったりもします。では、大人は一体何をするべきなんだろう。子どもたちのためにという、その１つがこの会議でもあるのかなという感じがします。すごく責任を感じます。ある対談で、こういうお話がありました。言葉の質と量が子どもの明るい未来を作るという対談で、東洋大学の教授と、小児科医でもあって文教大学の教授、お２方の、去年の、雑誌に載っているものの一部で、機嫌よく遊んでくれるからと、1,2 歳くらいの子にスマートフォンやタブレットを持たせている親御さんがいる。子どもにとって本当に良くないこと。我が子にしっかり育ってほしいと願うなら、スマホに子守りをさせないこと。人間の脳は会話を含めて人との関わりの中で発達している。スマホの映像を見続けていると、視覚を処理する脳の部位だけが発達し、語彙力もコミュニケーション力も育たない。経験や体験の量に比例して能力は育つ。親よりも子ども時代の経験が少ない子どもは、残念ながら親よりも運動能力も学力も低くなることが予想されている。こんな話です。ちょっとドキッとしながら私も見ました。スマホや AI とかを否定するわけではないのですが、この対談での内容は、間違っていない部分もかなりあるなっていう風に思います。子どもを育てるということはどういうことなのかとか、子どもをどんな大人にしなければいけないのか、どういう社会が必要なのか、これからやってくる社会を、鋭く想像して思い浮かべながら教育を考えていかなければいけないんだろうなと大人の責任を感じています。この小学校在り方検討会議は最終回になりましたが、本当に様々なご意見をいただきましてありがとうございました。下田の子どもたちの未来を語る上で、皆さまが大切にしたいことが皆さまで共有できての意見交換の場であったというふうに思っています。提言ということもありますが、そのことはどこにでも誇れることじゃないかという風に思います。SNS の活用も含めて、実にこうバランスよく子どもたちのあるべき姿を、望む姿を皆さまで語ってくださったと、そんなふうに思っています。これから、今日またさらにお力をお借りして整理していただきますが、ここまでの皆さまの協議内容を、ぜひ大切に進めていただければと思います。今回も、地域の幅広い分野の皆さまにお集まりいただきました。お忙しいところ、ご出席いただきありがとうございます。それから、静岡から武井先生と宮島先生にお越しいただいて、田村先生も今日は来てくださいました。本日もよろしくお願いします。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。それでは、次第に従いまして進行をさせていただきます。続きまして、学校教育課参事の宇仁より、今回の趣旨についてご説明申し上げます。

学校教育課　宇仁参事

下田市教育委員会 宇仁です。本日もどうぞよろしくお願いいたします。昨年 12 月 16 日に行われました第４回では、第３回までに皆さまからいただいたキーワードを基に、「小規模校を存続する場合」あるいは「学校を統合する場合」についてメリットやデメリットをあげ、子どもの発達段階、子どもや保護者の心情、地域の方々や教員の想い、学校施設のことや通学のことなど様々な角度から今後の小学校の在り方を検討する上で重要となることをあげていただきました。本日は前回お考えいただいた小学校の在り方を検討する上で重要となることを基に提言の「案」を各グループで作っていただきたいと思います。事務局の方でいくつか案として紹介させていただきますので、短い時間ではございますが最後の総まとめとして本日はご協議いただきたいと思います。本日も静岡大学の武井教授、宮島特任教授にもお越しいただき、７つの小学校区の代表区長様、保護者の皆様、学校・保育園・こども園関係の皆様で力を合わせて下田らしい小学校の在り方に向けての提言についてご協議いただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

学校教育課　平川課長

それでは、これからの進行は山本指導主事にお願いします。よろしくお願いします。

学校教育課　山本指導主事

では、改めまして、指導主事の山本と申します。本日はよろしくお願いいたします。

第４回は、グループごとに提言書を作成していただき、最後に皆さまで共有をしていただきました。今回は、前回の提言書等を基に、提言書の案をグループごとに作成していただくという形になります。前回やその前まで積み重ねてきた話し合いの内容を具体的に整理してもらうという最後の時間にしたいと思います。今回やるにあたって、皆様と話し合った内容を事務局でまとめました。もう１つ、今回をやるにあたり、どんなグループワークをすればいいかと考えたところ、まず、私たちも作ってみようという話になりました。最終的には提言書作成という形に持っていければいいかなっていう風に考えております。作成の方法ですが、提言書のイメージ図みたいなものを出しました。今日考えていただくのは、この項目に当たるもの、それとその内容です。この中身の部分を皆さまに整理をしていただこうかなという風に思います。よく提言書に、始めと終わりのところがあるかと思いますが、そちらは事務局でまとめさせていただきますので、皆さまにはこの中身にあたる部分を、項目とその内容を整理していただいて、提出用というものがグループに１枚あるかと思いますので、そちらに、まとめていただければなという風に考えております。話し合いの進め方もこちらに図示してみました。グループ全体で考えてみるという方法もあるかと思いますが、グループ内で、項目を割り振っていただいて、それぞれについて考えていただく方法もあるかなと思います。また、前回までに、自分が特に考えをお話ししていただいた方もいらっしゃるかと思うので、その方については、そのことについてまとめてみるという方法もあるかと思います。いろんな方法がありますし、項目もそこに４つ書くところあるかと思いますが、４つ作らないといけないわけではありませんので、各グループにお任せしようかなという風に思っています。それでは、こちらでプレ作成させていただいた提言書について簡単に説明させていただきますので、佐々木先生、よろしくお願いします。

佐々木企画主任

事務局に入らせていただいております、浜崎小学校の佐々木です。よろしくお願いします。私からは、まずこれから提案する３人が、提言書案を１つずつ３つ作った概要についてご説明いたします。では、この３人がどのように作ったのかについて説明いたします。

これまで開催してきた会議で、静岡大学の武井先生からは、統合か存続かという二者択一ではなく、下田にとって一番よいことは何なのかという基本に立ち返って、下田独自の教育の在り方を模索していく必要性についてご示唆いただきました。また、同じく宮島先生からは、デメリットはメリットであり、15 歳までの育ちを考えながら、７地区の特色を生かした七色の学校づくりをしていくことの重要性についてご示唆いただきました。委員の皆さまの協議の中からは、例えば、交通手段の確保、学校独自の体験的な学び、子どもが学びや学ぶ場所を選択する機会、合同授業や評価、学区や教育課程の工夫、下田だからこそできる形を考えたいという様々な、既存の枠にとらわれない新しいアイデアを数々出していただきました。下田の小学校は７校すべてが小規模校化していますので、地理的な問題、それから地域性、子どもたちの実態など一様ではありません。だからこそ、全国的なモデルをそのまま当てはめるのではなくて、下田の実情に合った教育の在り方を考えていく必要があることを、会議を通して学習を進めてきました。

それらを踏まえ、これから３名がそれぞれ作成したものを提案いたします。

提言 A　　佐々木企画主任

まずは私から、提言 A を作らせていただきましたので、提言 A 作者 S というところをご説明させていただきます。私は、柱を 3 つに整理させていただきました。1 つ目は、学びの環境という項目にしました。会議の中では、少人数で落ち着いて学べる良さを大切にした一方で、子ども同士が刺激を受け合う学びの場が必要ではないかというご意見をいただきました。具体的なアイデアとしては、4 年生以上は学期ごと学ぶ学校を選択できる単位制の課程ですとか、総合的な学習の時間で学ぶテーマに応じて体験や探究ができる学校を選択するなどといった案が出されていました。子どもたちの発達段階や学習内容によって、学びに適した環境は異なります。また、学年や学校という枠にとらわれず、ICT や交流事業などの活用、それらを実現する交通手段の確保など、学びの選択肢を広げるという視点を 1 つ目の項目にして整理しました。2 つ目は、指導体制についての項目です。これまでの協議では、学校 1 つ 1 つで完結させるのではなく、下田全体で支える発想が必要ではないかというご意見がありました。アイデアとしては、川根本町の事例にもありましたように、市内の学校を相互につながり合う学校群として捉え、7 校の先生方が各学校を行き来できるような体制を整えた上で、合同授業や教職員の専門性を生かした事業の展開といった具体案が出されていました。こうした新しい指導体制を構築していくためには、既存の学校では不可能なことがあります。そこで、柔軟な指導体制や教育課程が可能かどうか、制度や先進事例について十分研究した上で、下田が実態に合った形を模索していくという視点を 2 つ目の項目にしました。3 つ目は、七色の学校づくりについてです。会議の中では、7 校が同じ学校を目指すのではなく、それぞれの色を大事にしていくべきではないかというご意見がありました。それぞれの学校が、地域の特色を生かした学校として魅力を高め合うことが、下田全体の教育の豊かさにつながっていくのではないかという視点から、3 つ目の項目にさせていただいております。以上が、皆さまからいただいたご意見を基に、3 つの項目に整理した提言 A です。近い将来、下田ならではのオーダーメイドの教育環境が構築していけるよう、活用できる制度や先行事例などについて研究した上で協議を進めてほしいという内容を結びに書いてあります。以上が提言 A です。以上です。

提言 B

先ほどの提言の内容と重なる部分もありますが、提言 B としてお話しさせていただきます。まず、基本的な考え方です。少子化が進み、7 校すべてが小規模校となっている現状においては、柔軟な視点で教育環境のあり方を検討していくことが重要であると考えます。また、小規模校を減らす対象として捉えるのではなく、小規模であることの強みを活かし、不足する部分は補い合うという発想で、いずれも皆さまからのご意見を基に、これからの教育環境に何が必要かという点でまとめたものです。私は 4 つの柱に分けました。1 つ目は柔軟な学校運営ということで、少子化が進む中で、学校規模や児童生徒数が今後も変動していきます。そのため、固定的な枠組みにとらわれず、状況に応じて運営を工夫できる体制が重要であるという意見が多く出されました。具体的には、学校規模に応じた弾力的な学級編成や教育活動の工夫、学年や学校の枠を超えた学校の授業や交流学習、教職員の柔軟な勤務形態の検討などです。これは学校を 1 つの閉じた単位としてではなく、変化に対応できる仕組みとして捉え直す視点であると考えています。2 つ目は、多様な学びを可能とする教育環境の整備です。学校規模の違いが学びの機会の差につながらないようにすることが重要であるという意見がありました。そのため、ICT の効果的な活用による学習機会の拡充、教育資源の共有による規模に左右されない学びの提供などを通して、どの学校に在籍していても多様な学びが可能となる環境を整えていくことが必要です。そこで目指しているのは、規模を補うという発想だけではなく、むしろ小規模校の良さを生かしながら選択肢を広げることです。3 つ目は、地域全体で支える特色のある学校づくりです。学校を地域から切り離して考えるのではなく、地域と共にある存在として捉えることが重要であるという意見もありました。具体的には、コミュニティスクールの推進、地域人材を活用した学びの支援、地域のつながりを大切にした学校づくりなどです。地域資源を生かしながら、7 つの学校それぞれの特色を磨いていくことが、地区全体の魅力向上にもつながると考えています。4 つ目は、子どもの可能性を引き出す学びです。教育環境の議論において最も大切なのは、最終的にそれが子どもの成長につながるかどうかという視点だと考えています。このため、興味、関心に応じた学びや個別ニーズへの対応の充実、子どもが施策に参画する機会の確保といった、子どもを学びの主体として位置づける取り組みが重要であるという意見がありました。子どもが自ら考え、意見を持ち、学びに関わっていく経験は、将来地域を担う人材の育成にもつながると考えています。終わりに、4 つの柱はいずれも統合か存続かという単純な枠組みにとどまらず、柔軟で地域に根差し、子ども中心の教育環境を目指すという共通の方向性に基づいています。子どもにとって何が最善かという原点に立ち返り、提言 B とさせていただきました。以上です。

提言 C

最後になりますが、イラストになっているものです。私は、提言書をいろいろな方に手に取ってもらいたいということで、概略版というつもりで作成してみました。グループの話し合いを今まで聞いてきた中で、多様性や柔軟性、新しい形という言葉がいくつか多く聞こえてきたかなと思いましたので、私は、多様な学びの形へというタイトルをつけさせていただき、多様な選択肢や、子どもの主体性、柔軟にできるようなということで、項目を起こさせていただきました。中身は読んでいただいたとおりで、皆さんが話し合いをしていただいたとおりなので、ここではあえて紹介はしませんが、そのような 4 つの選択肢の中で概略版として作成したというような流れになります。

学校教育課　指導主事

私たち 3 人が考えたものがどれだけ参考になるかはわかりませんが、イメージとして参考になればなということで作りましたので、全く別のものでも構いません。もし参照できたら参照していただければと思います。それでは最後に、この後の時間の流れですが、14 時 40 分にグループワーク終了したいと思

いますので、それまでに提出用というものをまとめていただければと思います。今日は1時間ちょっとしかないので、時間が非常に短い中ですけれども、よろしくお願いします。今までの話し合いの振り返り等も必要かと思いますので、よろしくお願いします。今日は、時間いっぱい考えていただきたいので、全体共有はありません。責任を持って私たち事務局でまとめさせていただきますので、時間いっぱいお考えいただいて、それを提出していただく形になります。ただ、休憩等もありませんので、適宜休憩を取っていただければと思います。よろしくお願いします。

～意見交換～

学校教育課　指導主事

それでは、お時間となりました。グループワークを終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

学校教育課長

ありがとうございました。それでは、武井先生よりお話いただければと思います。よろしくお願いいたします。

静岡大学教授　武井　敦史　氏

こんにちは。私は、Dグループの中で議論に参加させていただいて、議論を聞きながら、同時に考えていたことを皆さまと分かち合いたいなと思っています。今日お話ししたことは、提言に向けて、様々な意見を出し合って、そしてより良い提言をまとめていくための1つのステップになりました。

逆の側から考えてみると、やがて1つの提言がまとまります。この話し合いというのは、そのための手段としての価値なんだろうかということを考えていました。

今の大学生は、よくAIを使ってレポートを書いてきます。かつては、それがわかりました。でも今はAIがすごく精度が上がってきています。大体似たようなことが書いてあって、それをあえて調べようとすれば多分見つけ出すことはできるんだけど、読むだけではそこまでわからないです。だけど、書いた学生と話してみるとすぐ分かるんですよ。思考に深まりがないんです。答えがこれはこういう意味ですよということは一応話せるんだけど、それ以外にどういう可能性があったかってことを話せないんです。だから、話をしていても正解に直結するような話し方になっていくんですね。

実は学校の先生でもそうだと思います。問題意識を持っていると言っても、その問題意識をちょっと掘っていくと、「それはあんまり考えていませんでした」みたいな感じになっていきます。

何を言いたいかというと、ここで話すことの意味というのは、いい提言書を作るためだけじゃなくて、それを作り上げていく過程の中で行った試行錯誤そのものが、これ以降も下田の命運に大きく関わるだろうなと思うんですね。

もうちょっと具体的に言うと、例えば小学校の人数が減っていきます。減ってきたら、じゃあどうするんだと言った時によく出てくるのが、こういう授業をやったらいいんだと。お互いに小学校でバスを行き来したり、オンライン等で一緒に授業やったらいいじゃないかと。それはその通りですよね。そして実際にその案を実行するとしますよね。

ところがやってみると出てくるのは、確かに、人間関係を広めるという意味ではそうなんだけれども、そこには多くの手間がかかるのではないかと。その割には学力は上がってないぞと、授業の深まりもないぞと。

そして、そうしたことが起こるというのはある意味本当のことだと思うんです。別に嘘で言ってるわ

けではなくて、実際にそういう課題はあると思うんです。ですが、課題はあるけれども、そういうことが起こるからといってやめていたら、いつまでたっても何も生まれない。

そういう時に力になるのが、こういう、皆さま今考えていた、他にもいろんな可能性があるということを考えた経験だと思うんですね。あることをやってうまくいかなかったら他に変えてもいいんです。変えてもいいし、他のやり方もきっとありますよ。だけど、何らかの形でいろいろとトライ&エラーを広げていくことをしなかったら、その可能性すら見えていかないじゃないですか。

あえてそんな新しいことをやって、導入する手間、導入コストを払ってやるよりも、いままでの方がもっと落ち着いてできるんじゃないかということを言う先生は必ずいます。だけど、その考え方だけでは、いずれ課題をカバーしきれなくなって、本当に子どもが生きる世界が狭くなってしまうでしょう。そうでなくするためにはどうしたらいいのかって言ったら簡単です。失敗してもいいから、とにかく新しいことに色々チャレンジしてみる。その試行錯誤の蓄積が力になると思います。

今、特にレジリエンスが注目されていますが、例えば、子どもが成長していく過程の中では、自分にとって望ましくないこと、それから自分の期待が外れること、こういうことは山ほどあるじゃないですか。それはあるんだけど、それが1回あって、ダメだという風になってしまう子と、別に期待はずれがあっても、そんなことはいくらでもあるよと思える子。どちらもいるわけです。

おそらく、学校という組織に対しても、それから下田というこの町に対しても同じことが言えて、1度何かを導入した時に、これは絶対成功しなきゃダメで、失敗してうまくいかないことがあったら、これはダメだという風になってしまう。そういうコミュニティと、別に失敗なんて当たり前なんだから、当然のこととして何でもやり続けるよという自治体とか、実際、あるはずです。

じゃあ後者の方で、失敗しても何度でもトライし続けるコミュニティを作るにはどうしたらいいかと言ったら、まさにこうやってですね、お互いにああでもないこうでもないと話し合ったその経験そのものが実は力になるだろうと私は思います。

僕らだって不完全な人間だから、どんなことをやったとしてもうまくいかないことがあるし、その中には人為的なミスもあるはずです。じゃあこういうことあったからもう2度とやめようねと言って、そこばっかり強調してしまう集団と、そんなことは挑戦してみた価値に比べれば微々たるもんだ、だから全然いいよという風に言ってくれるところと、やっぱりその2つの集団があると思います。後者になっていくということが重要です。

今日感じたことを2つに要約すると、集団としてのトレランスとレジリエンス、この2点です。

何かがあっても寛容でいることと、それから多少失敗しても粘り強く試行錯誤し続ける。実際にそれをやってみた時にどれだけ耐えるかっていうところは、その1番の原動力、パワーはこういう話し合いにこそ見て取れるんだろうなと、そんなことを感じていました。

ぜひ、これからもますます、今の挑戦を続けてもらえればという風に思います。私からは以上です。

学校教育課　平川課長

ありがとうございました。それでは、次に教育長からご挨拶の方申し上げます。

山田教育長

ありがとうございました。私もずっと、大体真ん中あたりでいろんな方々の声を聞きながら思うことがありましたが、これを事務局の方で整理します。大体、同じような思いを持って作ってくださっていますので、まとめるのは、そんな苦じゃないのかなという感じがします。それと、事務局が思っていることもあるので、それと大きく違うことはないけれども、ちょっとした表現の違いで取り組み方も違ってくると思うので、そこのところは精査して作らなければいけないなという責任を感じています。ただ、やっ

ぱりこういう思いなんだろうなということは、確かに聞き取れましたので、ほっとした面もあるし、それから心強いなと思った面もあります。色々1年前、2年前と遡って考えていったときに、中学校の統合した時のグランドデザインを思い出しました。あの当時、現場の先生方のプロジェクト部会というのをやりまして、その意見を吸い上げながら参考にしてみんなで作ったグランドデザインですけれども、学校教育目標が、グランドデザインの中に盛り込まれている。5、6年前にそういう構想を当時の先生方は思い描いていて、今に至っています。その7つの小学校がここにあるということはどういうことを表しているのかということを、これからまた魅力的な学校づくりの中で、皆さまと一緒に考えていきたいなと思います。どうしてもこうやって図面化すると、横断的にとか交流をとか、吸収をというのもあるかもしれませんが、縦の系統性というのも見ていかなきゃいけない。系統性はすごく大事だと思っていて、4年生で学んだことを生かして5年生でこんな学びをするっていうような、要するに縦のつながりを持って考えて、小学校の子どもたちが学んだことを中学校で活かせるように。そこで学んだことを社会人で生かせるようにという流れをちゃんと考えなさいよということです。縦の糸と横の糸、そういうことも考えながら、総合的に魅力的な学校を考えていくのが来年度以降かなという風に思っています。魅力的な学校というとピンポイントになりますけれども、皆さまのイメージというのは、それぞれの学校の魅力ももちろんありますが、小学校と中学校と地域と家庭も含めて、全部が魅力的な教育になるようなイメージを持って、それぞれピンポイントで考えていくということが大事かなという風に思っています。今日はありがとうございました。

学校教育課　平川課長

　それでは、最後、事務局の方から事務連絡させていただきます。事務局からのお願いになります。事務局の方で提言書ということでまとめる予定ですが、素案ができたタイミングで各委員の皆さまに共有をさせていただきたいと思います。内容をご確認いただき、ご意見等ありましたらご連絡ください。よろしくお願いいたします。事務局からは以上です。

学校教育課　平川課長

　それでは、以上をもちまして第５回下田市立小学校在り方検討会議を終了とさせていただきます。本日は、お忙しい中、ありがとうございました。